



Title	あのころの懷徳堂
Author(s)	外山, 軍治
Citation	懷徳. 1966, 37, p. 103-105
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90429">https://hdl.handle.net/11094/90429</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人であった。しかし先生には高師出の色彩は全く見られなかった。當時の高校生の嗅覚は、この點に關しては敏感であつたはずである。先生は重厚で、ゆったりとした大人の風格を感じさせる人物であつた。

先生が大阪高等學校から懷德堂に轉ぜられたことに關しては、當時の校長であつた某が、その腹心の部下を迎え入れるための工作だという噂があり、同僚や學生の有志が先生の自宅を訪れて真相をただしたことがある。しかし、先生は不満らしいことは全くもたらされなかったの

## あのころの懷德堂

あのころというのは昭和三年から四年にかけてのことである。わが師財津愛象先生が大阪高等學校教授の職を辭して懷德堂教授になられたのが昭和四年三月、天皇陛下が大阪市へ行幸になり、勅使を懷德堂へ遣わされたのが同年七月であつたから、懷德堂にとつても歴史的な時期であつたはずである。私は舊制大阪高等學校の二年から三年にかけてのことで、大學は京大をえらび、東洋史を専攻しようという志望がかたまりかけていた時期にあ

で、事なく終つた。ただ後になり、ごく近い人に向つて、あれは詰め腹だつたと告げられたそうである。傳統のない新設高校では、校長の御都合主義による人事は珍しくなかつた。

間もなく、なお少からぬ春秋を残しながら、先生は急逝された。書物の購入に急であつたために、御家族も苦勞されたように聞いている。いわば、先生の生涯は不遇の一語につきる。だが、大人であられた先生は、悠然として白玉樓中に向われたことであらう。

## 外 山 軍 治

たる。

私が懷德堂の聴講生になつたのは昭和三年九月のことであるが、もちろんそれには財津先生の紹介を煩わした。先生は懷德堂講師として、毎週月曜日の夜に定日講義ということで左傳を講じておられた。そのとき學校でも二時間のうち一時間は左傳の講讀になつていたので、そのつづきをもっと聽かせていただきたいと思つたのと、懷德堂に來講していられたいろいろな先生の警咳に接した

いという氣持からであった。それで、毎週土曜日に開かれる定期講演や記念祭典當日の講演にもできるだけ出席した。中でもとくに感銘をうけたのは、三年十月六日の記念講演で「章學誠の史學」と題する講演をされた湖南内藤虎次郎先生である。

講演の内容は少々専門すぎてよく理解できなかったが、そのとき先生は壇上から聴衆をみまわされて「ここには軍人のかたも見えておるようですが、武田家の兵學は武田家がほろんでからおこりましたもので……」というようなことを話された。

軍人は二三人最前列にならんで聴講していたが、そのうちの一人はたしか第四師團長林彌三吉中將であった。私は碩學の貫祿というのはこんなものかと妙に感心してしまったのである。かんじんの講演の内容はよくわからないで、ムードに感心してしまったことは少々てれくさい。記念祭典には在大阪の官衙の代表者や名士たちが多数出席して、堂外には自家用車がズラリとならんで、時ならぬ盛況を呈したものであった。

懷徳堂での財津先生の講義は、學校のそれよりは、何だかサラサラした感じで、少々よそゆきになってられるように思った。學校ではよく脱線して、その博識ぶりで私たちをよろこばせたのであったが、懷徳堂ではそんな

ことはなかった。何か疲れていられるようにさえみえたが、あるいはそのころから、時間外の講義が少しづつ先生の負擔になりかけていたのかも知れない。

聴講生の中にはいろいろ變った人がいた。今西さんという老人が、いつも腰掛にマントをしいてその上に端座し、ほとんど眼を閉じて聴いていた。何か共鳴することがあると、「フム、フム」と聲を出した。また「ときに先生！」ときり出して、風變りな質問をもちかけて先生をなやました。

その後、やはり私たちの先生で日本史の佐々木恒清先生が講師として『神皇正統記』を講ぜられることになったが、今西老はさっそく奈良市に住む佐々木先生を訪問し、いくつかの質問をしたらしい。先生の答えが氣に入ったのか、あとで私に、「あの先生はなかなかやり手や！」といった。この老人は、何でも南でやとな組合の書記長をしている人で、齋藤拙堂の楠氏研究の研究者であると聞かされて、懷徳堂はよいところだなあとつくづく思ったことである。私はこの老人から「お若いのに感心でんなあ」といわれたことがある。むこうでは私のほうが變っていると思っていたのであろう。

あこのころの懷徳堂のあった東横堀かいわいの風物もなつかしいものである。本町橋にはかき舟が浮んでいて、

あかりを川面にうつしていた。暖い大阪でも多はさすがに川風がつめたかったが、懷徳堂の教室には、小さいながらガストープが入っていた。あのころとしては、ゼいたくなものであった。

せっかくだって休講の掲示が出ていることもあった。學校では先生の休講はたのしいものだが、懷徳堂での休講には少々がっかりした。三年十月八日(月)、ま

## 吉田 銳雄 先生を憶う

私が先生に始めてお目にかかったのは、たしか、終戦後間もない昭和二十一、二年の頃であったと記憶する。ある日のこと、池田の古本屋の前を通りかかった私は、幾帳かの漢籍が店先に積みかさねられているのを見つけて、飛びつくようにこれを手にとって眺めていた。店の主人も今時珍しい客と思ったのであらう。あれやこれやと親しげに話しかけてきた。歸りがけに、漢籍の出版物があったら是非知らしてほしいと頼んでおいたところ、早速數日後に連絡があった。少々なら手ばなしてもよいと言われる方があるから紹介しましょうとのこと。すぐ

吉田 銳雄 先生を憶う

んわるく財津先生が休講であった。しかたがない。足をのばして道頓堀へ出た。辨天座で文樂の人形淨瑠璃が引越興行をやっていた。ぶらり立見席に入った。まんのよいことに、先代の竹本津太夫の日向島をはじめからきくことができた。左傳の休講もたのしいかなである。

今となつては何から何までなつかしい。諸先生のご冥福をいのりつつ。

四一、九、二記

## 高 木 正 一

その足で案内されたのが先生のお宅である。書物がとりもつてくれた不思議な縁とでも言おうか。書齋に通された私は、問われるままに、京都大學で中國文學を専攻しているむねお答えすると、この節、奇特な心がけだと、いろいろおほめや激励の言葉をいただいた上、若輩で一面識の私を、あたかも舊知のごとく、温くもてなして下さった。謹嚴な中にも慈しみのこもった、見るからに篤實な儒者らしい先生のあの時のお顔が、今もなお目なかに髣髴する。

以來私は、招かれたり、おしかけたりして、しばしば